

『名づけえぬもの』における時間

「今、いつか」をめぐって

高山 典子

序

1953年に発表されたサミュエル・ベケットの小説『名づけえぬもの』(*L'Innommable*)の冒頭の句「今、誰か。今、いつか。今、どこか¹」は、従来の小説において常に語り手によって保証されてきたかのようにみえる虚構「誰、いつ、どこ」を搖るがす文句としてしばしば引き合いに出される²。モーリス・ブランショは同年、これらの疑問文のうちの一部を引用して「今、誰か。今、どこか³」と題する批評を発表し、ベケットの小説三作品の人物と場所について解きながら、いかにして小説世界が歪められて本質的な探究へ向かうかを示す。ブランショは、表題から意図的に「今、いつか」をはずしているのである。さらには、この批評の最後で『名づけえぬもの』の世界について「時間の不在に陥った者が言葉の手に委ねられ沈み込んでいく中立地帯⁴」と形容する。「時間の不在」は、ロス・チェンバース、アラン・ロブ=グリエなどにより少なからず言及してきた。いっぽうブリュノ・クレマンは自身が修辞的表象的観点からベケットにおける時間の分析を展開するのに先立ち、ブランショが『名づけえぬもの』冒頭の二番目の問い合わせを除外し、時間については「時間の不在」と述べるにとどまることについて、「時についての問いの忘却に意味がないわけではないのは明白である。[...] サミュエル・ベケットの作品の時間性が、モーリス・ブランショの興味を引いていないのだ⁵」との見解を与える。

¹ « Qui maintenant ? Quand maintenant ? Où maintenant ? » (Samuel Beckett, *L'Innommable*, Paris, Minuit, p. 7) の « maintenant » を「さて」と訳すことが可能であろう。が、本文では文字どおりの意味を指摘するために直訳する。

² たとえば Anne Herschberg Pierrot, *Stylistique de la prose*, Paris, Belin, 2003, p. 15.

³ Maurice Blanchot, « Où maintenant ? Qui maintenant ? », in *NRF*, 1^{er} octobre 1953, repris dans *Le livre à venir*, Gallimard, 1959.

⁴ *Ibid.*, p. 685.

⁵ Bruno Clément, *L'Œuvre sans qualités*, Paris, Seuil, 1994, p. 267.

プランショがあえて深く取り扱わなかつたとすれば、「今、いつか」という問い合わせ『Quand maintenant?』は前後の「誰」と「どこ」という問い合わせに対しどのような点で異なるのだろうか。もっとも、この小説を含む三部作と呼ばれる作品群では、主体の同一性が崩壊していく過程にあって、語りの空間的時間的同一性が漸減の途をたどるととらえられる。『モロイ』および『マロウンは死ぬ』が仮定してきた語る主体の時と場所が、『名づけえぬもの』冒頭の問い合わせにより碎かれると考えられるゆえんである。「誰」と「どこ」についての探究である『名づけえぬもの』全体において、「いつ」という問い合わせは他の問い合わせといかにして関わりうるのだろうか。一瞬一瞬が細分化され堆積していくように表現されるこの作品において、遍在する「今」という語がもつ意味と方向を明らかにするために、われわれはこの問い合わせに立ち返る必要があるだろう。というのも字義的解釈にとどまるにしては問い合わせの及ぶ範囲が広いからである。

結句反復におかれた「今」はどれもべつの固有の今という時点を指している。その「今」がいつであるかを問おうにも、それはその語が発されたその時点で、しかも「今」と言われるやいなやもう今ではなくなっている。現在という瞬間を指示しながら、書かれたテキストにおいてはもはや今ではなくなった時を指示するばかりのこの「今」という語は、現在を逃れる脆弱な実体である。未来と過去との二つの方向をもつ語が、どんな凝固した時点をさしているのかを問うことは矛盾をはらむ。そこでわれわれが着目したいのは「いつ」(quand) のほうである。「いつ」には条件を表す性質がある。求められている誰かとどこかについて、同じように求められていると考えられる今はいつ今に「なる」のか⁶。

じつに「今、誰か」にしても「今、どこか」にしても、そうした問い合わせに明確な答えが与えられるわけではない。なにしろ200ページを超す問答の末、「話し続けなければならない」と畳み掛けるばかりのこの語り手について、読者は依然として当初の語り手像のこだまを受け取るにすぎないのである。

⁶ ジェラール・ジュネットはサルトルの「文学とは何か」に対しむしろ「文学とはいつか」すなわち「文学はいつ文学たりうるのか」「何がテキストを文学たらしめるのか」を問うべき問い合わせとして掲げる(Cf. Gérard Genette, *Fiction et diction*, Paris, Seuil, 1991, pp. 14-15.)。「いつ」には条件を表す性質がある。「なに」から「いつ」への転換は、構成主義的文学から条件主義的文学へと、視点の転換をもたらす。『Quand maintenant?』をもって「いつ今になるのか」を問うことの妥当性は、この小説において語ること自体が物語内の行為であること、あるいは語る主体がそう名づけられるところの「名づけえぬもの」がテーマ的ではなくレーマ的解釈によって可能となることから説明できるだろう。

たしかに語り手は自分自身について、及び彼を取り巻く場所について話そうとしているようにみえる。だが、おびただしい反復と否定、か弱い推論を重ねてひたすら続けられる探究をとおして積み重なっていくのは、「私は誰でどこにいるか」どころか、「私ではない誰か」と「私がいるのではない場所」ばかりである。するとむしろ、語っている主体はほかならぬ「私」で、どこでもない「ここ」にいることを導き出していく推論であるこの物語自体が、冒頭の「誰」と「どこ」という問い合わせに対する返答の試みであると考えられるだろう。

すると同様、これらの問い合わせに挟まれた二番目の「今、いつか」という問い合わせは、語り手をして作品全体にわたり「今はそのときではない」ことを語らせ、とどのつまりほかならぬ今に導くと言えるのではないだろうか。語り手が「私」や「前」をそう呼ぶことによって語りを進めていくとすれば、「今」と発するたびにその瞬間を発明しているかのようで、時間の概念がないようみえる。時間について、「かつて～ない」「これまでに～だった」といった表現の多用から分かるように、語り手は語りの現在時に結びつくかつての時間的感覚を持ち合わせているのはたしかである⁷。ブランショが「今、いつか」という問い合わせを取り立てて論じなかった理由は、ひょっとすると、こうした特定できない「今」の根源的な出現にあると考えることが可能かもしれない⁸。だが、その今は物語のただなかにあってはまだ実現されていない今である。来るべき今と語りの現在時とは別物であると考えられるからである。

『名づけえぬもの』の語り手が求めるのは、すでに見たようにおのが誰であるかについて、そして彼がいる場所について話して時間をつぶすことであるが、のみならず彼がいつの日か話しながら黙ることを目指していることに注目したい。

⁷ Cf. Clément, *op. cit.*, p. 269. クレマンは、時間的語彙がノスタルジーとともに言葉の化石となって現れることから、ノスタルジーがベケットの時間性に根拠を与えると述べる。

⁸ それというのもブランショが言う「時間の不在」は、芸術作品の本質的な探究をもたらすような原点に相当する、終わりなく続いていく無や死の状態だからである。

「きっとわれわれが向き合っているのは一冊の書物ではない。一冊の書物以上のこととが問題となっている。つまり、あらゆる書物の源となる運動の純粹な接近が。この原点においておそらく作品は道に迷い、この原点は作品をつねにむしばみ、終わりのない無為を作品のうちによびさます。作品はその原点との当初の関係をつねに維持しておかなければ、何であることもないという目に遭うことになる。「名づけえぬ者」に言い渡された咎めは、無限を汲み尽くすことである。」(Blanchot, *op. cit.*, p. 682.)

小説冒頭に発されるどこ、いつ、誰に関する三つの問いは、語っている主体についてと、場所について、そして「いつか」、言い換えれば作品全体を通じて探究されるどこ、いつ、誰に関わる。語り手の到達すべき目的はただ、彼が「私」であり「ここ」について、沈黙することである。すると「いつ」は話しながら話し終えることである以上、作品の終わりにしか実現しない。

したがって「今、いつか」はこの問いのもつ矛盾した性質、つまり「今」は「今」と言われるやいなや「今」ではなく、言表上は今を今として表しえない性質がゆえ、一見するとベケットに特有の解けない問い、あるいは言葉上のはぐらかしと処せられもする。「今、いつか」と問うたその「今」は字義的解釈による語り始めの時点を超えて、語りが期待し、推論し、論証的に導き出す語り終わりの「今」しか指しえないからである。

本稿でははじめに、語る行為自身と、語られる内容が希求する語り終わりとのあいだにある隔たりを明らかにし、ブランショの言う時間の不在が、現在を顕現するための手法であることを分析したうえで、言葉の時宜性と「今」を結びつけることを目ざす。

1. 隔たりについて

第一に、「今、いつか」という問い合わせ他の二つの問い合わせ異なる点に、問い合わせの矛盾があげられる。ここでは言説の抱える矛盾がもたらす書法について述べる。

1-1. アポリア

語り手は時について「いつ」と問うておきながら、まさに時を指標する「今」という語を発する。この矛盾原理は『名づけえぬもの』に支配的で、物語は「私はしゃべっているようだが、私ではない、私のことではない⁹」「私には声がないが、話さなくてはならない¹⁰」「物事を終える方法、声を黙らせる方法を探すには、おしゃべりを続けることだ¹¹」といった矛盾律に導かれていく。語り手を熱狂的に語らせるのは「ものを言うことへの激しい欲望にある真実への関心」であるが、彼が求めている言う行為はプライアン・フィッ

⁹ *Innommable*, p. 7.

¹⁰ *Ibid.*, p. 34.

¹¹ *Ibid.*, p. 21.

チが及論しているように何も言わずに言うことである¹²。なぜなら語り手は「言うべきことがなく、他人の言葉しかないままに¹³」話さなくてはならないからである。こうして語り手は、眞実以外への言及を止めなければならぬものの、余計な事柄を遠ざけるにはそれらをまず言ってのけなければならず、「彼らの土地で彼らの武器を使って、私はそれらを掃く¹⁴」とあるように、発話には自家撞着が含まれる。われわれの問い合わせ「今、いつか」も、撞着のうちに発されることが指摘できる。

だが、発話自体が矛盾であるにもかかわらず言説が存在するという点において、もう一つの矛盾が生まれる。ほとんど言葉でできていると言える語り手「名づけえぬ者」もまた、語り始めることと、語り終わることとの矛盾の中に見いだされる。

私は次のようなあらゆる物語をでっち上げた。中止するために、なし遂げるべき仕事、言うべき言葉の物語を。言うため、そして言いさすために見つけるべき眞実についての物語を。もう話したり聞いたりしなくてすむよう、押しつけられ、承知されて、おろそかにされ、忘れられる仕事、見いだすべき、果たすべき仕事についての物語を。諦めること、助けられて続けること、どこかでうごめいている自分を見いだすことを期待して。始まりと終わりとの間で、あるときは前進し、あるときは後退し、ある時は常軌を逸し、だがとどのつまりいつも地面をかじりながら¹⁵。

このように語り手によれば『名づけえぬもの』の言説は作り上げることと言いさすこととのアポリアであり、したがって始まりと終わりとの間にある。語り手には話すことへの強迫観念がつきまとだが、彼には自分の声がなく、「彼らの声」しかない。これはちょうど、1949年に雑誌『トランジション』に掲載された「ジョルジュ・デュテュイとの三つの対話¹⁶」の中でサミュエル・ベケットの言葉として書かれた次のような撞着に見いだされる、創作の根源の一つである。

¹² Brian Fitch, *Dimensions, structures et textualité dans la trilogie romanesque de Beckett*, Paris, Lettres modernes Minard, coll. « Situation » n° 37, 1997, p. 81.

¹³ *Innommable*, p. 46.

¹⁴ *Ibid.*, p. 63.

¹⁵ *Ibid.*, pp. 45-46.

¹⁶ « Three Dialogues with Georges Duthuit », in *Transition Forty-Nine*, n° 5, décembre 1949, repris en 1965 dans *Proust and Three Dialogues* (Londres, John Calder), traduits de l'anglais par l'auteur et par Édith Fournier (Samuel Beckett, *Trois dialogues*, Paris, Minuit, 1998). 対話の形式を取るが、厳密にはベケットと複数の芸術家との間に交わされた対話の再現であり、デュテュイはこの作品の文字化作業に関わっていない。

なにも表明するにふさわしいことがなく、表現する手段も、表現する源も、表現する権力も、表現したいといふどんな欲求もないが、同時に、表現する義務があるということの表現¹⁷。

絵画に関する対話であるが、引き続くデュテュイの言葉に「非常に個人的」と形容されるように、この箇所はおよそベケットの芸術上の理念を表す発言であると考えられている。ここで、表現することがなにもないという無の状態と、表現しなければならないという義務とが「同時に」という語で結ばれている。つまり語ること自体に矛盾があるが、その矛盾こそが、言葉のない状態を言葉がある状態へと同時に導くことが読み取れる。ベケットの書法の一つに、こうした同時に相反する事柄を可能にする矛盾を指摘できるだろう。これがアポリア的な言説のゆえんである。

『名づけぬもの』でも同様、容易に語りうることを言うことは望まれることではなく、「嫌な仕事」を意味する『pensum』に喩えられ、その遂行だけが語り終わりを可能にすることが読み取れる。「お仕置きの宿題が終われば、うっとり[口から]生き生きとよだれを流したい放題にするだろうに¹⁸」。言葉を言うべきであることと、言うのを止めることが個々の言説の目的であるとすると、これら二つのことは意味上矛盾しているが、一つの行為に結びつくという点において、時間上では同じ方向に進むと考えられる。すると言説に存する語り手の存在もまた、何を言わんともしないままに発言することと終えることとの間に矛盾をはらんで見いだされる。こうしたアポレスティックな矛盾がもたらす言説は、一つの流れである時間の中に異なる二つの方向と意味とを作る。

どうしよう、私はどう進んでいくのだろう、何をすべきだろう、私のいる状況で、どうするべきか。純粋なアポリアで、もしくは肯定と否定によって。肯定も否定も少しづつにまたは早晚消えてなくなるが¹⁹。

アポリアの狭間に生じている個々の言説からなるこの作品全体は、語ることの否定と肯定とのあいだに引き裂かれるように出現し、それぞれが相反するものの一つの流れに帰結していくことになる。矛盾律はこうして、同一の言説をめぐる二つの事柄の隔たりに文学を作ると考えられる。

¹⁷ Ibid., p. 14.

¹⁸ L'Innommable, p. 39.

¹⁹ Ibid., p. 7.

1-2. 発話と言説との隔たり

ところで、話者は話しているようだが、それは彼の声ではないというアボレスティックな自己言及は、語ることと言われた言葉とに隔たりがあることを示す。この隔たりは、語り手の抱く、語り手が話しているらしいという様子が、彼に聞こえてくる声によって説明されるという感覚によって表現される。『名づけぬもの』の話者が抱く、自分の周りに「彼ら」がいて自分でなくその彼らが話しているという感覚である。その誰かが「私」に二人称で話しかけた言葉は、引用符なしに地の文に直接組み込まれ、話者が「誰か」の言葉を自分の者として言い直しているかのようだ。もっとも、地の文に埋め込まれたそうした誰かの言葉は、文の途中に大文字から書き表されることから、読者には「引用」の始まりについて最小の手がかりは与えられるが、どこでその「引用」が終わるのかは明かではない。文体の観点からすれば、他者の言葉はここで音として書き込まれていると言えるだろう。つまり、誰かが言った言葉を「聞こえるとおりに言う²⁰」のである。

全く差異のない言表は「私は話している」(Je parle) である²¹。主部と述部とが、語る行為と語る内容とがこれほど一致する言説はない。言われるやいなや、そして言わしながらにして実現されていく言表行為である。しかしながら、『名づけぬもの』の場合、語り手は「私は（マードを）引用している²²」というスタンスで話しているのである。語り手には何らかの声がささやくのが聞こえ、あるいは聞こえてきたことを述べる。したがって、作品に再現される声は、話者の声でもあるが、話者の口を通して伝えられた誰かの声でもある。このため話者の口を通すときには、すでに言わたったことが一瞬あとに引用されることになる。

語り手はつねに現在ある発話の機能であるのに対し、物語は過去として語られる特性を持つ。物語が語られることは、もはや今は現在ではない過去、つまり不在の時と現在の時との間を埋めることである。

「今、いつか」における「今」は、まだ今ではない状態から、まさしく今になり、もはや今ではない状態への流れを生み出す。話者はその語が言われるのを聞いて、その語を言っていることを知る。というのも、彼は話しているのが自分であるのかどうか、よく分からないからである。すると「今」は

²⁰ Beckett, *Nouvelles et textes pour rien*, Paris, Minuit, 1958, p. 149.

²¹ Cf. Jacques Derrida, *Le Monolingisme de l'autre : ou la prothèse d'origine*, Paris, Galilée, 2006.

²² *L'Innommable*, p. 55.

いつになつても今ではない。今という語と、その瞬間との間には、隔たりがある。

今私には自分が語り始めるのはワームの声ですと言っているのが聞こえる。知らせを伝えます、つまらないことですが。話しているのは私であると私が信じているというふうに彼らは信じているだろうか。これだって彼らの言うことだ。それというのも、私にはひとりの私がいると私をして信じさせようと、そして私がそれについてまるで彼らが彼らの仲間についてそうするみたいに話せるよううにそうするわけだ [...] ²³。

彼らは彼らと言う、彼らについて話しながら。話をしているのが私だと私がそういう思いこむように。あるいは私は彼らという、得体の知れない誰かについて話しながら。話をしているのが私ではないと思いこむように²⁴。

この作品の話者によって伝えられることは、あたかも「私」によって言わされたかのような形を取るが、もし話者の述べるとおりであるとすれば作品内の人々によって言わされたことが聞こえてくる様子を表したものである。話者の脳には聞こえてくる他人の言葉と、話者の口を通して言わされた言葉とが響いているが、どちらも話者の耳によって知覚された声であるから、それを言っているのが話者であるのか他人であるのか彼には区別がつかない。作品は話者の聴覚の再現の形をとるといえるだろう。かくして、語りの現在に維持されるもののむしろ、聞こえの現在に導かれていく言表は、内容と行為に隔たりを生み出す。この隔たりは、その言表がもたらす物語の言葉自身である。『名づけぬもの』の語り手が、しゃべり続けることで表現するのも、それから逃れようとするのも、どちらも、自分の声と耳に聞こえてくる声との隔たりからである。

こんなちょっとした休憩にたいしたわけなどない。彼らが黙るときは私もそうする。一秒あとに。私は彼らより一秒遅れている。私はその一秒をとっておく、一秒間、一秒を表すための時間、自分が一秒をもらうのと同じように、次の一秒をもらいながら、まあそんなものはもはやどうでもよいが。私には一瞬もない²⁵。

²³ *Ibid.*, p. 98.

²⁴ *Ibid.*, p. 138.

²⁵ *Ibid.*, p. 136.

このこだまが解消されるときに「今」という言表は、過去のものではなく「今」となるはずである。ところが、話者が語り続けるあいだ隔たりが生じている以上、隔たりの解消は語り終わりである。

2. ほかの誰かと同一性

プランショによる「今、いつか」の排除に関し、第二に、この小説のテーマが語る主体であって語りの時間ではない点を指摘できる。ところが「私」に関する記述はここで、自分とは隔たりを画する言説によって可能となっている。隔たりを引き受けるのが同一性であることをここで例証したいと思う。

2-1. 他者、他所

『名づけぬもの』の話者が言及を試みるのは、自分が誰でどこにいるのかについてである。「私とこの場所だけしか問題になりえない²⁶。」すると冒頭の問い合わせのうち「今、誰か」と「今、どこか」という二つだけが話者の語りを導く問題提起のように見える。三つの問い合わせの二つ目は主要な問い合わせではないことになる。

しかし、実際話者が述べていくことには、彼についての固有の指標がなく、「誰」と「どこ」の問い合わせについてすら明確な答えは与えられていない。「私は彼だった²⁷」「私たちには私が欠けている²⁸」と言うも、つまりところ語り手は一人称の「私」に戻る。語り手は「私」が誰であるかという問い合わせるために「まず汚し、次に掃除する²⁹」必要がある。そこで「まず私が何でないかを言う³⁰」ことになる。作品に与えられているのは、言ってのけられるべきところのもの、つまり自分が誰ではないかと、どこにはいないかということである。言い換えるならば、この物語の言説が及ぶターゲットは逆説的に、私がそうであるのではないほかの誰か、私がいるのではないよそで、それらが私のものではないほかの言語（ラング）によって語られる。

今度は私が誰でどこにいるのかを言いながら自分を見失わず、どこへも行かず、ここで終えるという望みを捨てない。 [...] 要するにこうだ。私についてとこ

²⁶ *Ibid.*, p. 25.

²⁷ *Ibid.*, p. 49.

²⁸ *Ibid.*, p. 87.

²⁹ *Ibid.*, p. 22.

³⁰ *Ibid.*, p. 65.

の場所について、われわれを消すこと無しに話せるようになるのか、いつか黙ることができるようになるのか³¹。

だが、ほかの誰かとどこかの探究は、完全にべつの個体になることではない。一人称の「私」は誰にもなりえず、語り手は完全に自分を見失うことが無い。それというのも、違うということの裏には、同じということが必要だからである。べつであることを認めるには、もとの「私」ともとの「ここ」に相当するものがなくてはならず、違うということを認めていく過程で他者性が同一性を引き受けると考えられる。

いつものことながら先へ進むのをどうも恐れてしまう。というのも先へ進むとはここから立ち去ることだからだ。自分を見つけ、見失い、姿を消してまた始めること。はじめは行方不明だが、それから少しづついつものようになる。べつの場所で。私はそこにずっといたと言うだろう。私はその場所について何も知らないだろう、何も知り得ないだろう。見ることも、身動きすることも、考えることも、話すこともできずに。こうしたハンデにもめげず私は何かを知るだろう、いつもと同じことが証明されるにたるわけだ³²。

ここで言われる「いつもと同じこと」の根拠として、語る主体が相も変わらぬ存在であるところの同一性を指摘できる。そしてこの同一性には、必然的に時間的な持続が伴うはずではないだろうか。

2-2. 話者に対する疑似的な聞き手

口に出して言われるたびに「今」「私」「ここ」は話者に関係づけられる。語形の上ではつねに同一であるが、一瞬一瞬新しい話者が持ち合わせる同一性は何によって保証されようか。

語ることに重要性をおいた『名づけえぬもの』をはじめとする一人称の作品では、語ることで「私」という主体が言葉につなぎ止められているが、その語っている者自身が本当に「私」であるのかという保証はない。

たえず私はそこにいて、たえずそこから出てくる、 [...] 話をしながら私はそこにいる、もし話しているのが私ならばだが、いや私ではない、あたかも私であるかのようにしているわけだが³³。

³¹ *Ibid.*, p. 28.

³² *Ibid.*, p. 26. 引用内の強調は引用者。以下同様。

³³ *Ibid.*, p. 201.

サミュエル・ベケットは40年代後半に一人称による作品を多々生み出した。これは、語り手の口を通して語られる、つまり代弁される三人称の物語に対して、一人称はそれ自身が表出する言述であって、そこでは言葉が純粹に発されるからである。『名づけえぬもの』の語り手によれば以前の小説では、語り手は「代弁者³⁴」、人物は「傀儡³⁵」であって、言われるのはでっち上げられた言葉でしかない。ある見地に立てば小説の歴史は語りの本らしさの追求であると言えるように、サミュエル・ベケットの初期から中期の作品では、作品ごとに語り手が主人公と漸進的に接近していく構造をとり、そのなかで主体が一人称をもって本らしく語る一人称小説へと変遷するのを確認できる。しかし先の引用にあるとおり『名づけえぬもの』の語り手は、語っている「私」が自分ではなく、ほかの他者であるような感覚、あるいは語られている言葉が自分の言葉ではなく、誰か他者が語った言葉であるかのような疑念を抱く。主体が揺らいでいく過程のかかわり合いにされた一人称の問題は、小説において「私」という言表が指すのは必然的に「私」を指すのではなく、誰か他の人物を指す可能性があることを含んでいると言えるだろう。

いっぽう言語上では、一人称の「私」を保証するのは二人称「あなた」しかない。たしかに、戯曲やラジオドラマなどを主に創作した時期を経て70年代の散文作品では、二人称および三人称の使用が特徴的となる。

二人称および三人称への回帰は、語る主体の表出に必要な一人称への挑戦に矛盾するかのようにもみえる。だが、むしろ主体が崩壊の様子を見せたあと、かろうじて感知されうる主体を描き出すための手法として二人称が使われていると考えられるだろう。

『見ちがい言いちがい』(*Mal vu mal dit*, 1981)においては、闇の中で闇が使う二人称とべつの誰かが使う三人称の声が響いているが、二人称の声がかろうじて、三人称で語られる誰かに届き、誰かが存在することになる。が、二人称の声が語りかけるのが、またべつの誰かならば、第三者が存在することになる。「あなた」の現在していることと過去の思い出を語る二人称は、対話の中でその声を聞いているはずの誰かの存在をほのめかす。三人称の声曰く、「かれ」は二人称の声を聞き、言われているのが自分のことなのかどうか二人称を一人称に変えて推論し、その声を聞いているのかも知れないべつのひとり、「伴侶」に思いをはせもある。ここに、かろうじて捉えられる彼という存在が姿を現す。

³⁴ *Ibid.*, p. 17.

³⁵ *Ibid.*, p. 8.

こうした他者の追求は、現在時の問題と合わせて考えることができるだろう。アラン・バディウによれば、ベケットが物語と舞台において見せる問いは「行けたとしたらどこへ行けたものか」という「どこ」、「声があったとしたら何を言おうか」という「何」、「もし存在できたなら私は何ものになろうか」という「誰」に代表される。これに加えて「私は誰か、もしもうひとりいるとすれば」という他者の追求が1960年以降のベケットの物語と舞台に見出せるとの見解を示す³⁶。他者の追求が後期に加わること以上に、バディウがベケットの主要な問い合わせ上記の四項目にとどめ、時についての問い合わせを含めなかつたこと、のみならず「私」ひとりに関する問い合わせの非現実な仮定に対して、他者についての問い合わせを現在形で表していることを指摘しておきたい。他者性が保証することになる同一性は、現在性との関わりの中にとらえられると考えられる。

3. もう一つの時

「今、いつか」をめぐって第三に、この物語の最終的な目的に語り終えることがあることを指摘しなければならない。停止のときの模索、これは時間上の探求であり、物語がもたらす時は、いまだ到来していないべつの時である。分断された様々な「今」が、一人の誰かと、もう一つの「今」との間に発されていることを述べ、隔たりを感知させる書法について考えたいと思う。

3-1. 細分化され堆積していく時間

既に触れたが、『名づけぬもの』において語ることの義務は、語り終わへの希求との狭間で遂行される。この作品の語りがよそやべつの誰かを表しているとすれば、時間についてはまだ目的を遂げていない別のときを表すと考えられる。語りが続いている以上、話者は語りから放免されていないからである。

言ってしくじったこと、もう言わないだろうこと、ひょっとすると、できればだが、言うだろうことを言う代わりに、もっとほかのことを言うほうが良いのではないだろうか、たとえまだそうすべきでないにしても。私は試すだろう、

³⁶ Alain Badiou, *Beckett, L'Increvable désir*, Paris, Hachette, 1995, p. 12.

もう一つの現在において試すだろう、たとえまだ私のものではないにしても、休みも、涙も、目も、理由も無しに³⁷。

語り手は「私」が誰でどこにいるのかは容易く言いうことではないため、そうでないところのべつのものを作り上げている。これと同様、語らずに済むような時を語ることは不可能であるため、語られている各瞬間はもう一つの時である。語り手は涙を流し、よだれを流すようにして言説を垂れ流していくが、「持続は重要ではな³⁸」く、話者は瞬間ごとを取り扱う。

私はこのことを問うだけで物思いにふけってしまう。こうした問いは、ある瞬間に話が途絶えそうになったときの話のたねになる以外に目的がないのだとどんなに思ってみたところで、このみごとな説明も私を満足させはしない³⁹。

「今回」「今」「この時」という語の多用、そして前言撤回は、時間が瞬間ごとに細分化されていることを示している。語り手には光が見えているようで、瞬きをすると光が瞬く様子が「光はおそらく絶えず一定に差していくのだろうが、私はそれをゆらめきによって時たま知覚する⁴⁰」と書かれているように、この物語の叙述は事象のレベルではなく語り手の知覚のレベルで各瞬間が取り上げられていると考えられる。語り手は物事を「発明する、でっち上げる」ことによって語りを続けるが、われわれはこの「発明する、でっち上げる」に加えもう一つの意味「その場その場のために考えつく」という意味を見いだすだろう。瞬間ごとに結びつけられた「今回」「今」といった語の使用は発話の現在の立ち位置を不明瞭にしているかのようだ、話者の記憶と時間性の把握が曖昧であるようにとらえられるかもしれない。

その一方で「もはや～ではない」「これまでに～ではない」などの表現の多用もまた事実である。語り手は過去から今に至るまでの記憶を引きとどめている。「私はかつてべつのところにいたことがない⁴¹」「私にはもう声がないから⁴²」「こうして大根汁はまえよりもおいしくないこと、かわりににんじん、やはりスープ入りのものだが、これがかつてより美味しいことが分

³⁷ *L'Innommable*, p. 33.

³⁸ *Ibid.*, p. 37.

³⁹ *Ibid.*, pp. 12-13.

⁴⁰ *Ibid.*, p. 12.

⁴¹ *Ibid.*, p. 25.

⁴² *Ibid.*, p. 183.

かつた。スープは変わっていない。私がほとんどきちんと理解できる言葉はこれだ [...]」⁴³。

こうした時間的な表現をとりあげ、ブリュノ・クレマンの研究は語り手がノスタルジーを抱いて用いていることを例証している⁴⁴。ノスタルジーとは、異なる環境におかれたことによる違和感に起因する感情である。同様に『名づけぬもの』の語り手は、もはや存在しない今とはべつのときを引き合いに出して叙述していると考えられる。このことから、今ではないべつの時との比較の中で、今をとらえていると考えられるだろう。べつの誰かとべつの場所の希求は、べつの時への憧憬を伴う。さらに語り手の目的はこれにとどまらず語り終えることであるとすれば、語っている現在時は、語り終るべき時ではなく、もっとべつの時を求める必要が生じていることになる。ノスタルジックな言及はもう一つの今が語り手によって求められていることを意味する。

話者は一続きの過去について記憶を持ち合わせている。分断されているようみえる一瞬一瞬は、したがって「今」ではないべつの時との関係のなかで語られていると考えられるだろう。のちに後期作品に頻出することになる他者性の憧憬への伏線を読み取れる。

そして少しづつ彼らの人生についての古い問題がほんのしばらく立ち現れるだろう、どう生きたらよいのか、早死にしようと長生きしようと、手助けもなく、導きも無しに。するとべつの状態のべつの試みが思い出される。私は考えたばかりのような問いを自分に投げかけるだろう、彼らが手助けし、ささやくのだが。自分について、彼らについて、時間が急に移ったり年が変わったりすることについて、それから成功するために講じるべき手段について——とはいえないいつも失敗してきたのだが——自問する。彼らが満足して、きっとしまいに私をそっとしてくれるようそうするのだ。自由になつたら私は私の方法でもうひとりのほうを満足させるように努める、それが私の方法ならばだが。もうひとりのほうが満足して私をそっとしてくれて、容赦してもらい、休息と沈黙の権利をもらえるように、それが彼次第であるのなら⁴⁵。

こうして、隔たりのなかで言述が続けられ、対立するそれぞれの見解どうしの隔たりから言葉と時間が作られ作品が続いていく。続くことに対する停止は、継続に存する小説作品にとって唯一のアクションである。「今、いつ

⁴³ *Ibid.*, p. 70.

⁴⁴ Clément, *op. cit.*, p. 269.

⁴⁵ *L'Innommable*, p. 80.

か」に対する根本的な答えはこの停止した状態によく提示されるにすぎない。『名づけえぬもの』は「今、誰か。今、いつか、今、どこか」に始まり、「それ」「誰か」「声」の到来の兆しをもって終わる。語りは矛盾律に導かれ、語ることと語り終えることの要求によって続けられる。この小説において、話者に関する「誰、いつ、どこ」は主体との隔たりを示すことによって語られる。「今、いつか」という問い合わせに答えを示すには、いまだそのときではないことを示すことを語るよりほかない。あるべつのときについて語るには、主体の同一性に基づいて語られるため、作品に書き込まれた「今」という言表は、作品の進行とともに現在進行形で進む。搖るぎない今、語りえない今、求められている瞬間、これらが語り終わりの瞬間にようやく示されると考える。

3-2. 隔たりを感知されうるものへ

これまでにみてきた「べつのもの」は「そうであるもの」との関係のなかで語られてきた。「名づけえぬ者」がアポリアの狭間に表出するように、アポリアを原動力とする『名づけえぬもの』における言葉はまた、異なる物事、矛盾のあいだに現れる。問うこと自体がアポリアである作品の冒頭の問い合わせから、作品終わりの語りの停止によって示される答えまでのあいだに書かれているのは、既に言及したように語り手の感覚に基づく、語り手のものとも誰のものとも区別つかない言葉である。

だが私の声ではないのかもしれない、その一部たりとて。そんなふうになるのかもしれない。あるいは物語が始まっているのかもしれない、まったく静かに、わからないように⁴⁶、

語ることは隔たりを感知させることである。この小説で、隔たりから聞こえてくるのは声である。

私は何かを感じなくては、そうだ何かを感じる、彼らは私が何かを感じると言っている、[...] それは言われるだろう、彼らは私が誰であるか言ってくれるだろう、私にはそれが聞こえてきているだろう、私の外に、そしてすぐさま私の内側に、私は中央にいる、きっと私ってのはそれだ、世界を二つに分けるようなもの、一方は外で、もう一方は中側⁴⁷。

⁴⁶ Ibid., p. 38.

⁴⁷ Ibid., pp. 159-160.

プランショがベケットについて述べた『終わりなき対話』の一断章「言葉は長いこと続いていかなければならない」でベケットの『事の次第』の「声」への言及は「だがこの声は何なのか」(Mais quelle est cette voix⁴⁸?)という疑問文の形でなされることに着目したい⁴⁹。この「声」が表すのは、テクストに書記行為を通して書き込まれた声である。「言葉、切れ端、そして何もなく、そしてほかのもの、ほかの言葉、ほかの切れ端」のように、文の構造が著しく断片的な字面にはパンヴェニストの言う文における「活動中の言語のありさま⁵⁰」がほとんど現れていないかのようだが、しかしながらそこに書かれている言葉をとおして実現される声のことを、プランショは「だがこの声は何なのか」と疑問文という形でくわだしている。というよりむしろ、声に対して抱かれる疑問こそが、声と対峙しているのである。疑問文はここで、文字化されたテクストと、言葉の積み替えによっては再現できない声との間にあ。

作者と作者が言ったこととの間には、感知されるようにすべき開きがある。言葉は長いこと続けられねばならない⁵¹。

われわれは発話行為から書かれた言葉への隔たり、そして書かれているテクストから書きこまれることのない声への隔たりが感知されるさまを、この疑問文に見いだせる。ここでプランショの見せた隔たりを感知されうるものへ変質させる言葉の働きは、アポレスティックな疑問法をとおして最後に一つの可能性にたどり着くサミュエル・ベケットの書法の一つであるといえるだろう。

この小説の冒頭句は、サミュエル・ベケットのテクストの中でよく知られる句のうちの一つである。だが、ひとたび作品自体から切り離されたとき、この句が作品全体に対して送り返す包括的な意味と価値とが理解されているだろうか。この句は、語り手という話の審級を物語（歴史）に持ち込む小説の例として、あるいは信頼しうる虚構の枠組をくつがえす言述の例として引用されることが多い。だが、この句における「今」と「誰か」「いつか」「どこか」との隔たりを、この引用が表しうるとは考えにくい。

⁴⁸ Blanchot, *L'Entretien infini*, Paris, Gallimard, 1969, p. 486.

⁴⁹ Cf. Clément, « Mais quelle est cette voix? », in *Samuel Beckett Today / Aujourd'hui*, vol. 19, Amsterdam, Rodopi Bv Editions, 2008, pp. 89-101.

⁵⁰ Émile Benveniste, *Problème de linguistique générale*, t. I, Paris, Gallimard, 1966, p. 126.

⁵¹ Blanchot, *op.cit.*, p. 478.

結び

『名づけえぬもの』の語り手は、文に文を、節に節を、言葉に言葉を重ね上げて、さまよいながらさまざまな物語を試みるなか、語りうることを挙げ尽くし、排除し、語り終わりに到達する。これは、可能な条件を消去していく手法である。本論では「今、誰か」と「今、どこか」という問い合わせが「誰」と「どこ」についての探求であることを援用して、叙述を導いていく語り終わりの時点への希求は「今、いつか」の問い合わせに対する答えの模索であるとらえた。こうして隔たりを顕現化する書法によって、べつのものとべつの場所を求める過程における主体の同一性がかろうじて知覚化される。語り終えの瞬間に言葉の停止でしか「今」を顕現できないとすると、あらゆる言説はさまざまな条件の検討であったことがわかる。本論で試みたように「今、いつか」を「今はいつ今になりうるか」として条件的な視点からとりあげるならば、語りが停止するときに話者の求める「今」が実現すると結ぶことが可能となる。今が今になりうるのは、言葉が引き攣って落下していく状態そのものであり、プランショに時間の不在と称された終わりなき探究である。が、この形容は決して時間の排除や汲みつくしを意味するのではない。サミュエル・ベケットにおいて書くことは、言葉がない状態から言葉のある状態への隔たりを作り、最後に言葉を停止させることである。語ることと語りの中止とは、書記行為において一つの方向である。始まりと終わりとの隔たりに、言葉を発することの時宜性を見つけ出すことであると言えるだろう。

だが言葉の中止とともに到来するこのもう一つの時を感じすることもまた、アポリアではないだろうか。